『Matsu 22』　2006年
36.5 × 51.5 （cm）
パネルに雲肌麻紙、墨、胡粉、水干、樹脂膠

浅見貴子 –カオスの中での覚醒

浅見貴子は多摩美術大学(日本画専攻)を卒業し、その後も個展を中心に発表し、日本画画材を探求してきた。その制作は伝統的な技法を駆使しつつも、狭い表現内容にとどまることなく、作家独自の絵画を創出し、近年では各公立美術館での企画展等に多数出品されるなど日本画、水墨画の現代的展開、あるいは絵画としての新たな表現として多方面から注目されてきている。

その作品は水墨技法を十分に用いながらも、現代美術の表現を踏まえた、これまでに無い新たな視覚的な効果を示している。以前より抽象的な表現によって、見えない大きなもののうごめきを示してきたが、近年では樹木の描写からはじまりながらも、今日的意識による新たな絵画生成の段階に踏み至ってきている。具体的には表面からの描写の他に、紙の裏から墨とドウサによって描き重ねてゆく。そのことによって墨と、そしてそれをはじいてゆく描線が出来、さらにまるでガラス絵のように表裏反転の像となる。このように水墨技法によりながらも、ネガポジの効果をみせて、図と地の関係は幾重にか反転してゆく。樹木といいながらも既存イメージに寄り掛からず、時に空(くう)を描き、あるいは影のように現れるイメージが入り込み、いわば多重のイメージが現像されてゆくようだ。垂直の浸透を繰り返しながらも、空隙が入る複雑な画面は、意識的な操作性の果てに、カオティックな体感を示すのだ。それは描写絵画のように見えて、一瞬後には逸脱してゆく。奥行きのある絵画を描くに似て、実は一方でむしろ距離を失効させていき、浅い奥行きの中、点は表面に、視座の手前に張りついたようになりながら、常にその描写を超えた点と線は素材じしんへの還元の道を指示している。そこでは樹木の景を切っ掛けにしながら、まさに樹のように網状組織になったなかで、内に囲繞されて居る、静かな熱気を帯びた優れて知覚的な意識に訴えるものとなっていよう。色彩を感覚させるモノトーンの魅惑の一方で、時に我々はイリュージョンとその失効の渦中という空間の不明さの中で、見ていても見ていない茫然自失の眼差しとなるものである。

天野 一夫(美術評論家・京都造形芸術大学芸術学部教授)